（一） 號二十六第 日曜土 聞新日日城京 日四月九年九正大 （可認物便郵種三第日一月七年九正大）

中無休刊

京城日日新聞

社説

道知事諸君へ

道知事會議は昨四日を以て終れり、四日間に於ける會議に於て如何なる議案を議せられ、又如何なる議事項ありしを知らず、故に此に其會議の結果に對しては論議するに能はざるも、道知事諸君は近く京城を去りて任地に歸らるゝならん……

地方制

第四十條 歳入の……

殖民地 概説

第六章 殖民地の産業

第一節 農業

政界茶話

東京より（上）

田中弘之

創作 地獄の幸福（四）

邦枝完二

内外電報

愛蘭問題愈重大

愛蘭問題は愈々重大なり各都市に於て依然戰鬪繼行されつゝあり（倫敦來電）

新共和黨の新政策

佛勞働同盟分裂

佛國勞働總同盟は內紛と協議…の爲分裂の兆あり（巴里來電）

對獨石炭供給禁止

グ街に暴動再發

波軍依然進出繼續

紐育埠頭の盟休

邦人移民絶對禁止

排日問題の前途

國務卿と排日問題

齊多に動員下る

ウエルフネ政府はチタ市に動員令を發したり

統一政府樹立前提

優勢なる馬賊出沒

七箇條の和議條件

新國會解散實行乎

通州暴動鎭靜す

日支軍事協約廢止

重慶に總司令部

總司令官に唐繼堯

支那差引勘定斷行

旅費問題解決す

船舶法撤回せず

井染大佐の使命

豫算概算書出揃ふ

和議代表任命

對支借款發表

陳氏佛國公使

地方官更迭期

兒島軍司令官諭告

埃及獨立の內容

所謂墓地規則に就て（下）

大塚參事官談

絶對的に

甚だ遺憾

謬妄も茲に

不滿の聲

大な誤解

客月鮮鐵業績

木浦貿易増加

哈爾賓より

道知事會議第三日

國際親和會講演

七九聯隊見學

伊澤上院議員

農作と水利事業

忠北知事 張憲植氏談

完全肥料と養豚業

大阪便り

外米は不振

水電事業

仁川分監移轉

手拭の不況

風塵錄

人事

商況

株式界

京株市場出來値

仁川期米特電

東京期米特電

大阪期米特電

제62호 1920. 9. 4.

三面論壇

京電は市民の怨府

木本專務の健在を疑ふ

中央瓦斯電氣の事業は料金の數額と同時に設備の完全を計る必要があることは云ふ迄もない……

城瓦斯電氣株式會社が此點を無視し普通一般の營利觀念の下に市民の迷惑を意にせざる傾向を見せてゐるのは默過し得ない重大問題であらねばならぬ會社は過日水害の為め瓦斯の發生不充分なりとの聲明の下に夜毎に或時間を限り一週間の供給停止を發表し各需要家に對し甚大なる不便と損害を與へたが是は二週間を經過せる今日猶ほ復舊されてゐないのみか近來頻々として起る或は電燈の消滅或は電車の運轉中止を來し併も長時間の停止は如何に甚大な不便と夥しき損害を需要家に與へつゝあらうか殊に夜間に重きを置く營業即ち活動寫眞館、料理屋、劇場等が受ける損害に至つては名狀すべからざる莫大なるものである會社は獨占的事業なることを一種の强味として一般需要者の不便と損害に對し何等考究しないのみか一方料金の徵收は最も酷烈峻酷で滯納者に對しては瓦斯と云はず電燈と云はず直ちに供給停止を行ひつゝあるを見ても此間一の公共的觀念の影を見せず營利の前には何物もなしと云ふ一般の營利會社と同樣利益の多きと會社の都合計り考へて他を顧みないとは辯明の餘地は有たない筈である……

……今や一方龍山發電所には降灰問題の惹起するものあり更に瓦斯電力の供給不足はやがて大なる輿論となりて會社を襲ふかも分らない……京城電氣會社は今や市民の怨府となつて居ることに氣付かざるか……木本專務の健在なるか否やを疑ふて居る。

米議員團の都入り

數百名の警官隊が水も洩さぬ警戒振

二日米國議員入京時刻の前後約一時間は増田日比谷警察署長の指揮する約三百名の正服巡査と警視廳の私服巡査百餘名とが警戒の任に當る可く正服巡査は……

東京驛より帝國ホテル迄

私服巡査は驛構内とホテルの内外警固に着く筈なるが之に就き新任池田外事課長曰く最も危險なるは鮮人よりも寧ろ在京支那留學生にて最近調査に依れば總數三千八百十五名中恐らく一人も多少の排日思想を抱かざるは無し……

氣脈を通じ或陰謀を

……（東京來電）

排日表示の赤旗

在京不逞鮮人の陰謀に三千の支那人も參加す

警視廳の大活動

一日夜不逞鮮人の新なる一計畫暴露せり在京鮮人中の有力者千餘名より成る鮮友會員が神田錦町一ノ十九番館止宿中央大學生鮮準東を中心とし警官の監視を避くる爲め隊伍を組まずに東京驛内及米國議員團の宿所帝國ホテル迄の沿道にかけ一齊に赤旗を翳し排日の意を表する計畫にて……

警視廳は目下大搜索に努めつゝあり尚此計畫の背後には排日支那人も潜み居る事判明し市内千五百の鮮人及び三千の支那人は此際如何なる計畫を進めつゝあるやも測られざるより警視廳は市内各署に嚴命し一日夜來其監視に努めしめ二日は多數警官を派し東京驛帝國ホテルの大警戒を爲す筈なり（東京來電）

一派遂に米議員に迫る

格鬪の末五名逮捕

朝鮮人五名は二日帝國ホテルにて米國議員團一行に迫り……警戒中の警官と格鬪の後……せられたり（東京來電）

山縣公に脅迫狀

朝鮮青年團から

三十一日午前小田原なる……朝鮮青年團と記したる……

五十町歩の水田陷落

炭坑夫五名埋沒さる

猫（六）

金魚房の菊蝶

鮮人知事の名論

今度の知事會議は此の後の總督政治一大改革の前提か

意義重大な知事會議

大官の傍聽も頗る熱心

有り觸れ

持參して

鮮人知事

米議員團の都入り

爆彈投擲

宣川警察へ

女の新しい職業

タイピストが市内で習へる

近來は京城に於ても朝鮮總督府文書課に六名……

銃殺說

或は事實か

勞働者としての京城の女（八）

千七百圓の女髮結

女髮結大野神は山の神中で別格

「オトコメカケ」と云ふ異人種

好い紳士

提燈

勞銀

汚い話で

熱望

潛艦猛火に包まる

死者五名重傷者四十三名

徹底的に

又しても流言蜚語

赤池警務局長の毒殺說

當の御本人は至極壯健

龍山爆彈は虛報

商業銀行犯罪の終局

盜んだ金でも返濟すれば結局無罪か

奇怪極まる

突如釋放

背景の為

朝鮮古來の慣習以上の不思議

本社電話番號

編輯用二、三二八番

營業用二、六二三番

古來朝鮮

女房

安全

永山菊奴の死體受取

で銀行と當屋の一悶着

劍も

府内の虎疫盛返す

累計再び一千を突破せんとす

十美人投票第六回開票

油の乘つた混亂戰

吉奴一龍轡を並べて朝駒多美三を仆す

玉良一躍して三役に入る

運動競勝の幕は切られた吉奴は東として龍駒は……第六回開票と共に……

▲御訊ねの件は本社投票係へ

御注意

▲家號及芸名の誤つたのが多いため整理上甚だ手數を要しますから御注意を願ひます

▲記載事項の無い藝妓に對する御投票は無效となります

▲御郵送よりは成るべく各所へ設置してある投票箱へ御投入の方が便利だと存じます

▲五十票以上の投票は成る可く一……

第六回開票

十美人投票

九月三日正午迄

一三五票	中 新花月	吉奴
一二四票	京 千登世	一龍
一二九票	京 仲の家	朝駒
一二四票	いちよう	多美三
一二一票	京 丸の家	玉良
一〇九票	中 花本	菊千代
一〇八票	京 花の家	伊達清

一〇六票 新 房中 ばん太

九五票 新 芳本 桃葉

八八票 新 紅家 華蝶

十票以下次の通り

豫告

第一回豫選締切 九月七日正午

第二回豫選締切 同月十五日同

最後決勝締切 九月二十日正午

二十二日本紙上に發表

全南の虎疫

累計七千餘

▲女給仕入用▼

京城日日新聞社

小説 照手姫 （六十二）

旭亭桜山口演

是から十男士の活動

照手は勿論遊行上人、さては一山の者一人として、助重の念状をばぬはございません、助重は大六を抱き上げて、頬を摺附けて嬉しがり、照手が今日までの苦心を聞いて、如何に夫婦の間柄とは云へ、能くも是迄に盡し與れたと厚く禮を述べ、是れから先きの身の立て方は何うしたものかと首を捻れば上人は傍より決して心配するな、倶の身として政府の事は申し悪くなけれど、是より室町御所へ斯くいふ次第を語り越し鎌倉持氏の罪状に就いて一應一件を申上げる心算ぢやから、先づ其れまでは當山に足を留め、將軍の沙汰を待つが好からう」そこで助重夫婦は其儘熊野に足を留めて、上人よりの消息を待つ事になり、遊行上人は京都へ上つて、室町御所へ参殿し、將軍に御目通りを願つて、鎌倉持氏の暴政、山名義人、一色式部少輔の悪行等を審さに申上げました、室町將軍に於ても、誠に小栗一統の者を氣の毒に思召し、上人の言葉を容れて、一時丹波の蜂之山といふ處を[illegible]ながら、助重へ賜はり、國々に對し、助重の勘氣全快致す事になりました、因つて小次郎等した甲斐に依り、小栗一統の者は蜂之山へ集まるやうにとの觸れを出し或は制札を建て、續いて照手姫、大六を連れて、蜂之山に乗込みました、城持ちといふ譯には參りませんが、既に角一廓を造つて、再び世に出るといふ事に相成りました左らば此の蜂之山へ一同の者が直ぐに集まつて來るかといふと、何に致せ、モウ〳〵三年も、チリ〳〵バラ〳〵になつて居たのですから、中々左うは參りません、そこでお話が三年前に立ち戻つて皆さん久しくお待かねの十勇士武勇傳と申す事に相成ります、扨ても十男士は既に申上げたる如く彼の阿助の次郎の許に潜在いたし居ります中、山名、一色の兩人を初め、つて持氏公へ讒言を構へ、持氏公よりは京都室町御所に向つて、阿助の次郎、小栗助重に心を合せ、鎌倉を謀ろうとの陰謀あり、既に三州矢矧の城へ、俄に籠もり、速かに討ち平げざるに於ては、由々しき大事を惹起すべければ、何卒駿河の今川に對し、阿助討の役目仰つけ下されて度しと申遣りました、然將軍家御聞より詳しい事は御存じない駿河の今川了俊、仲秋の親子に對して、阿助小栗征討の沙汰に及ぶ今川親子は然なくも、隣國の阿助を討つて己の版圖を擴はんといふ下心のある處へ、將軍家の命令が下つたのでありますから、得たり賢しと直に二萬の同勢を率ゐて三州矢矧城へ取詰る事に相成ました、小栗主從は之を聞いて大きに驚き小次郎自ら阿助兄弟の前へ來つて「扨て助次郎殿三郎殿、我々十一人是れへ潜在致せし爲に、其許等に謀逆人の汚名を着せたは、甚だ氣の毒の至りなり、今川の同勢此の所へ取詰ると雖も、我々十一人さへ居らざれば當家に迷惑は掛るまい、依つて今の内に我々は此處を立退く、所存なれど、萬一立退く能はざる場合には、據ろなく枕を列べて討死いたすの覺悟なり、御身等兄弟は是れより鎌倉か又は京都へ參られて、決して小栗一統と同意致さざる旨を申開きを致され度し」と頼んだ處、次郎三郎の兄弟は大口開いて打笑ひ、次「心配あるな助重殿、共に立ち共に倒れるは親族の好み、今一族たる其許を殺して、阿助兄弟何に依つて此身を立てませうや、敵は[illegible]時は城を枕に討死いたすまでの事、決して心配なく御家來方へ言附けて、兵糧の貯め、城の口々を固め

